野田宇太郎 文学散歩 第23巻

野田宇太郎 文学散歩

第23巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23（1948）年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16（1941）年，第1回九州文学賞（詩）受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　23
九州文学散歩　中

昭和53年12月5日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32　電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1978
0395-90123-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

筑紫よく見む　七
小倉の鷗外　一三
遺跡　足跡　二人の友　女中　トクさんの話　「我をして九州の富人たらしめば」と送別会
豊津　二七
「三四郎」の故郷　枯川の村　枯川の生家
白秋のふるさと　四五
南関　母の家　ごんしゃん　鬼童小路　鵲を追う
薄明の歌
漱石の足跡　六九
熊本の家　九州の旅　峠の旧道　「二百十日」　内牧
草千里
蘆花と熊本　九二
出発　「蘆花」の誕生　大江義塾跡　かたみの机
人吉にて　一〇五
球磨川の畔　故郷の廃家
五木の谷のうた　一二四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

子守唄　川辺川に沿って　五木少女
青島の回想　一三八
宮崎と文人　旅の日の長塚節
新しき村　一三七
小丸川峡谷　山上孤島　一夜
椎葉　一五五
日向の民謡　稗搗節　柳田國男と椎葉村　上椎葉にて
鶴富屋敷　餘韻
牧水の里　一七四
坪谷へ　山の歌声　美々津
佐伯の獨歩　一八五
「春の鳥」　雨の城山
肥前の蒲原有明　一九三
松浦あがた　須古　呼子にて
壱岐への旅　二三一
呼子の歌碑　壱岐の島　壱岐で死んだ曾良　三富朽葉の墓　長塚節の旅　雪連宅滿を悼む歌

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

九州文学散歩　中　おぼえがき

本巻は昭和二十七年末調査の『九州文学散歩』上巻について、翌二十八年十二月に再び九州各地をめぐった記録で、はじめ単行本としては上巻と共に『九州文学散歩』正続二巻として刊行した。この正続二巻について忘れ難いのは、その後ラジオによって全巻朗読が九州地方に放送されたことである。文学者にとって自分の著作がそのまま朗読にも価することが証明されるほどよろこばしいことはない。本巻の刊行に当っては他巻と同様に完成を期して増補訂正を行うと共に、あらためて壱岐の一章を追加した。

なお、『九州文学散歩』は上中下三巻で終るが、このあとに続く下巻は上中二巻から十年以上の時を隔ててあらためて全九州を踏査した記録であることを念のためにつけ加えて置く。

（著者）

九州文学散歩　中

筑紫よく見む

一

山荒く海はきほへど少女子をうつくしといふ筑紫よく見む

吉井　勇

はじめてあこがれの九州に旅立つことになって、『酒ほがひ』の歌人吉井勇が若き日にうたった「筑紫よく見む」のこの歌の想いは、同じく九州をはじめて訪れた人々に共通するあこがれの想いでもあったろう。山荒く海競う九州の自然の中には雅びた伝説があり歴史がある。かと思うとキリシタン史のような世界人類史の一ページを血ぬる物語がある。学問と伝統がある。美しいというのは何も少女子に限られたことではない。少女子はその美しく尊いものの象徴にすぎない。

わたくしは九州に生れながら九州をよく知らなかった。いや、九州に生れ育ったがために九州を知り得なかったと云った方が正しいのかも知れない。だが、この知らなかったということは確かにわた

くしにとって幸いでもあった。わたくしは処女地を恋う開拓者のようなよろこびの心で、自分の父祖の地であり自分の故郷である九州をあこがれるようになった。そのねがいの一部をかなえることができたのはつい昨年の冬のことである。

冬の旅では、自然はまことに厳しく、またわびしく旅人を迎える。わたくしはその厳しさとわびしさの中を、我ながらよくも勇敢に突き抜けたものだと今にして思う。わたくしにそのような豫期し得ない力を与えたものは何であったろうか。未知へのあこがれ！　それであったに違いない。

苦しい旅の思い出というものは、時間がたつに従って、いつのまにか楽しい思い出に色を変える。小雪に白く身を染めながら歩き廻った長崎や雲仙嶽、暗い雨のたそがれに濡れそぼちながら彷徨った原ノ城址や口ノ津のさびしい港、そしてついに疲労に病んだ身を、運を天にまかせて行った日向や肥前など、その苦しみの部分だけが一層あざやかによみがえるのも、やはり思い出の魔術とでもいうのだろう。

「筑紫よく見む」の心は思い出の魔術にかかったわたくしの中に、いよいよ強くめざめはじめた。わたくしはしばしば「お前は筑紫を本当によく見たか」という内心の問いに戸迷わずにはいられなかった。よく見たつもりでも見落しということがある。準備の不完全ということがある。怠慢もある。それに、これは当然のことだが、近代文学史の範囲でめぐる旅とはいえ、ただ文学だけの知識ではどうにも理解し得ない、その土地だけの特殊な風土や学問や歴史との関連がある。その結果わたくしの知識の限度が問題となってくる。わたくしはそう痛切に感ずるままに自分の知識の分野をより広く、よ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

り深くする事をつとめた。――一年がたった。

その一年間に、「筑紫よく見む」の心はいくらか成長したようである。なぜなら、わたくしはふたたび九州へのいざないに身をまかせて旅の翼を羽ばたきはじめたからである。

そこであらためてわたくしは九州の新らしい地図を心に描いてみた。荒々しくあちこちにそそり立つ山々。そしてこの九州の大きな島を取り囲んで絶えず四方からその岸辺をおびやかす青く神秘的にうねりながら怒濤を走らせる海。その岸辺、その山間にわたくしを呼ぶ声々が木魂している。

その木魂に耳をそばだて、眼をみはった。そして、わたくしはやがて自分を呼ぶ声々の木魂を、三つに分けて考えることができるようになった。

二

山荒く海競う九州の、その奥深い山間の峡谷には、数百年あるいは数千年の歴史と伝説とが秘められ、時にそれらは源平哀話の「稗搗節」や、虐げられた者の怒りのような「五木の子守唄」や牧歌的な「刈干切唄」などのすぐれた伝承民謡となって、なお今日に生きている。メロディは別にして、文学としての歌詞だけをみても、これらはすぐれた近代文学として耐え得る一種の古典性さえ感じさせるほどのものが多い。つまり九州の古い風土の中に自然に発生した詩歌である。わたくしが自分の心に新らしく描いた九州の地図の中から選び出す呼び声の、その第一がこれである。

そのような自然の詩歌や独得の歴史や、学問藝術の伝統を持つ九州を生れ故郷として、その故郷をまた自分の文学の故郷とした人々、これがわたくしを呼ぶ第二の声である。まず北原白秋がいる。若

山牧水がいる。宮崎湖處子がいる。このほかに、生れ故郷は東京だが本籍が九州で、そこに青年期の数年を住み暮らして文学への志向を強め、そのペン・ネームに九州のなつかしい海の名をとった蒲原有明がいる。これらはいずれも詩歌人であったことも何かしら九州の自然の特質を示しているようである。わたくしはこれに散文家としての徳冨蘆花を加えて置きたい。

まだこの他に九州を故郷とする近代文学史上の人々は多い。しかしそれを一つ一つ拾ってゆくのはわたくしの今度の旅の目的ではない。ただこの二度目の九州の冬の旅で、昨年ついに機を失った二人の九州出身の人物をあらためて加えてみるつもりである。この二人は必ずしも近代文学史上の人物ではないが、一人は豊津出身の社会主義者堺枯川、もう一人は人吉の犬童球溪である。球溪はかつて全国民に愛唱された「故郷の廃家」「旅愁」などの歌謡の作詞作曲家でもあったから、思い出す人も多いだろう。

つぎに、わたくしを呼ぶ九州の第三の声は九州を生れ故郷とはせぬまでも、九州に数年をすごして文学史上に九州の名をとどめた人々である。森鷗外、夏目漱石、國木田獨歩、ラフカディオ・ヘルン(小泉八雲)、齋藤茂吉、そして九州博多を終焉の地とした長塚節などが思い出される。

このほか九州を旅した人々を数えて居てはきりのないことだし、そのような人々のうち、九州にとって特に記憶すべき人々については昨年の冬の旅でふれておいたから、最早多くをいう必要はあるまい。

以上はわたくしの再度の九州の冬の旅の首途に当って、ざっと描いてみた心覚えにすぎないが、前

の旅と今度の旅との相違は、前の旅ではおもに自然風土を中心に文学をたずねたのに対して、今度はその文学と人間の探求を中心にしてゆきたいことである。従って前と同じ人々の名も出るのは出るが、内容は全く違ったものになる豫定だし、一応重要な人物にしても、前にある程度深く触れ得たものは割愛して、出来るだけ重複を避けるつもりである。

さて「筑紫よく見む」の呼び声は、どうやらわたくしの手からペンを奪い、旅の仕度をせよとしきりにせき立てる。またしても、山荒く海競う九州の自然がわたくしのまなかいに迫ってくる。わたくしはふたたび東京からなつかしい九州へ、九州へと、列車のカダンスの音ももどかしい旅に立つのである。

小倉の鷗外

遺跡

一

小倉に着いて、まずわたくしの心を誘ったのは鷗外遺跡のことであった。

小倉には鷗外がかつて暮らした家が二軒、様子は大分違ってはいるが、ともかくも遺っていて、その一軒は辯護士の家になり、もう一軒は金光教会に化けている。わたくしは昨年だけでも二度そこを訪れた。しかし、あれから一年が過ぎた今、はたして健在であるかどうかが妙に気にかかった。

これは小倉に限ったことではないが、戦争の痛手がまだ癒え切れず、日本中の都会らしい都会はいつどこに行ってみても修復中か普請中であるし、ガタビシと絶えず騒がしく何かが姿を変えている有様で、落着きというものがさらにない。まして公共的な保障のない文学者の故家など、どう変るか知

れたものではない。たとえその家はそのままだとしても、金光教会が料理屋に変ることぐらいは世間では普通のことである。

鷗外森林太郎が近衛師団軍医部長から、小倉の第十二師団軍医部長に転任したのは、明治三十二年六月で、三十七歳の時であった。

その月の十九日に鷗外は小倉に着任し、二十四日の雨の日に鍛冶町八十七番地の宇佐美という人の借家に居を定めた。その家が、現在の辯護士の家である。

才能学識ともに群を抜き、若くして近衛師団軍医部長となり、東京のはなやかな文化の中にいた鷗外が、突然地方の師団に転任させられたことは、鷗外としても大いに不満なものがあったに違いなかった。ほかの見る眼にも、それを左遷とはいわないまでも決して栄転とは映らなかったろう。鷗外の『小倉日記』によってみても、東京から小倉に向う途中、大阪に立ち寄り、知友と会談していささか鬱を忘れているし、大阪を出発して、舞子を汽車で通った六月十八日の日記には「是日風日妍好、東海に沿ひて奔る。私に謂ふ、師団軍医部長たるは終に舞子駅長たることに優れるに若かずと。……」としたためている。小倉赴任の心情を察するに餘りある一節といえる。岡山でもまた軍人以外の知友井上通泰などが出迎えて、鷗外の心情をなぐさめたが、徳山から船で門司に上陸して小倉に着くと、そこではすべて軍人ばかりがこの新任の軍医部長を儀礼正しく紋切型に出迎えていた。当然のこととはいえ、鷗外にとっては心みたぬ小倉入りでもあったらしい。

前夫人登志子と結婚後約一年にして別れ、独身をつづけていた鷗外は、家事その他を他人にまかせ

るよりほかはなかった。潤いの乏しい不自由な生活ではあったが、ともかくも鍛冶町に翌年十二月二十四日まで約一年半を過ごした。その間、二月四日には前夫人の死を東京の親友賀古鶴所からの便りで知り、ひそかに悼んだことが日記でもうかがわれるが、同じ年七月十二日の日記には「新聞紙落合の第一師団の地位を占むるを伝ふ。是に至りて、予の帰東の途絶えたり。」とあって、自分の不遇をかこつかのような当時の心境も窺える。この二つはとくに鍛冶町時代の鷗外の生活と共に注意をひくし、鷗外の帰東の思いがかなり強かったことを知ることが出来る。しかし、みたされぬ鷗外の気持を慰めるに十分な、小倉の友が鷗外の前に現われることになったのも、まさに鍛冶町を去る一カ月前の十一月二十三日であった。かねて鷗外を尊敬していた玉水俊虡（たまみずしゅんと）という小倉の曹洞宗安国寺の僧が、寺再建の勧進文のことで相談に訪れたのである。

二

鷗外は着任の年の十二月から馬借町（ばしゃくまち）の公教会佛人宣教師のベルトランについてフランス語をあらためて勉強していた。これも鷗外が自らを慰めることでもあったには違いないが、なお、鬱勃とした鷗外の教養心に火を放って、その小倉生活を意義あらしめることになったのは、安国寺の僧玉水俊虡であった。この小倉の禅僧玉水師から鷗外は唯識論を聴き、玉水師は鷗外に哲学入門の訳読を聴く仲となったのである。このほか、やがてまた福間博という若いドイツ語学者が加わることになって、小倉生活がさらに活気を帯びたことは、鷗外が大正四年に発表した小説「二人の友」からも容易に推察できる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook